老舎研究会会報 第5号

胡絜青女士 題字

第三次老舎学術討論会

平松圭子

そもそも3月25日からの予定であったのだが、急に開催期日が繰上げられ、その故か、日本側老舎研究会からの参加者は柴垣団長以下5名であった。開催地が北京、それも北京語言学院であったから、参加者数は恐らく前回よりかなり多かったことであろう。毎日の昼食時、十数卓近いテーブルが殆ど満席でとても賑かだった。

老舎が不幸な死を遂げて早くも二十年になろうとしている。討論会の回を重ねるごとに老舎に対する評価は高まって行くようだ。今回のテーマは老舎の作品に対する再評価であった。折しも長編テレビドラマ「四世同堂」が完成し、電波にのり、「月牙児」もテレビ化放送された直後だった。「四世同堂」はとりわけ高い視聴率を得たとのことで、従って研究発表の中にもしばしば「四世同堂」中の諸人物が引用されていた。

研究発表は30分ほどの時間が与えられていたが、早い口調で原稿を読みあげるので、主旨を聞きとるのも仲々難しかった。発表題目からも解ると思うが、老舎の生きた時代、社会の分析を行い、それを通して老舎の作品、あるいは作品中の人物像に迫るといった方法が取られていた。（今回は参加者の為のレジュメは事前に配られなかった。終了後、原稿を提出したが、発表はしなかったという分について何名かの論文をいただいた）

時代分析とあいまって、ほぼ同時代の作家や文学研究者（例えば魯迅、茅盾、巴金、馮雪峰）の研究の必要性を強調し、五四以後の文学の潮流を全面的に再評価し、新しい文学史を作る必要があると主張する人もいた。ヘーゲル、ディドロの名も出ており、美学の研究方法とか研究態度を採り入れた方法論が新しい研究方法として生れつつあるのが感じられた。もちろん研究者自身の資質を高めなければならないという声も聞かれた。

かなり広い範囲に、そして、研究と限らず感想、意見等できるだけ多くの人が発言するよう、再三司会者が呼びかけていた。蘇叔陽氏（老舎のように北京市民を描く）や趙大年氏（旗人出身の作家）のような作家の発言も面白かったし、「四世同堂」の最後部英語の部分、「鼓書芸人」の中国語名訳を完成させた馬小弥女士の「老舎が亡くなった時の彼の心情に関心がある」という一言に私は胸が打たれてしまった。

その老舎の死について、彼を死に追いやったのは中国文化の「落後性」ではなかったかという具体的な指摘がなされたのは注目されてよいだろう。

五日間にわたる研究発表のまとめにしてはたいへん簡単に過ぎるが（私の先入観と貧弱な聞取りの力からくる誤りがなければ）以上がとくに感じられた点である。

期間中1日参観が行われた。語言学院をバスで出発、「土城兒」（北京西北郊外）、太平湖跡、徳勝門、新街口、第十三小学校、師範学校、缸瓦市教会、西四、護国寺、小楊家胡同、最後は灯市口の老舎の遺族の住む家に行き、一部の人は舒済さんの家で熱い豆汁と打鹵麺をごちそうになった。この日は雪が降りとても寒かった。ベッドのすぐ側までうず高く本や資料が積まれてあった。私たちは同じ部屋のすみに置かれた食卓のまわりに腰を下ろした。同行の中国人の誰かがいった。「これが老舎文集を編集し、続

刊している研究者の家なんですから」と。

最後の3月19日午後のアトラクションには方家小学校（若き老舎が校長をした）の生徒による相声、歌唱のほか、「茶館」公演でおなじみの北京人民芸術劇院の「茶館」メンバーによるかっての北京の行商人の売声が圧巻だった。「四世同堂」のテレビ放映以来、北京の古い風俗を残そうとする気運が起りつつあるようだった。魏喜奎が唱った曲劇「柳樹井」の一コマも忘れ難い思い出となった。

会期中何かにつけてお世話になった舒乙氏、舒済女士には厚く御礼申しあげたい。老舎夫人胡潔青女士は少し片方の耳が遠いほかは、お元気そうだった。4月に香港で「茶館」が公演されるので、娘さんと共に香港に出かけるといっておられた。益々の御長寿を祈りつつ5日間の討論会の報告を終る。

感　想

杉本達夫

今回の老舎学術討論会の席上、涙を二度見た。涙で言葉をつまらせたひとりは「鼓书艺人」の訳者馬小弥氏であり、いまひとりは主催者の中心人物王行之氏である。馬氏は馬宗融と羅淑の間に生まれたひとである。母羅淑は抗戦初期に産褥熱のため、35歳の若さで世を去ったが、その数少い作品は四川農村を描いて、いかにも個性ゆたかである。父馬宗融は回教徒であり、老舎に『国家至上』を書かせたひとである。馬氏と老舎の接触は重慶時代の少女のころに始まっているのであり、老舎を語りつつ、想い出はまさしく泉の如く湧き出ていたにちがいない。馬氏は抗戦文学を、とくにその中での老舎の役割を高く評価すべきであると訴えた。白色テロの恐怖のなかで、飢餓にたえつつ勇敢に戦ったのは、地下党員ばかりではなく、党外知識人もまたそうであった。その知識人たちの戦いが、従来不当に軽視されてきた、と馬氏は述べたのであるが、老舎のことを語りつつ、同時に父親の不遇を語っているのではあるまいか、とわたしには思われた。フランス文学者である馬宗融が新中国でどういう処遇を与えられていたのか、たび重なる政治運動のなかでどういう立場におかれていたのか、わたしはまったく知らない。ただ「父のことは語りたくない」という馬氏の言葉をききながら、父娘ともにずいぶん辛かったのだろうな、と勝手に解釈したにすぎない。

王氏は青年期に北京文联で老舎の近くにいたとか聞いた。氏の閉会の辞はしばしば涙でとぎれたのであるが、その涙の下から出た「イギリスにシェークスピアあり、中国に老舎あり」という一言が、わたしには些か驚きだった。老舎を記念する文脈の中での発言とはいえ、とにかく老舎を一国を代表する第一の作家と規定しているのである。こういう評価が出せるようになったのかと、わたしは興深く感じた。

馬、王両氏のように老舎の身近にいたひと以外にも、多くの発表者が「老舎評価の不当な低さ」にふれていた。これには文学史を革命史から切離し、文学自体の論理にしたがって再構築しようという最近の動向が背景にあろう。加えて影像化された老舎作品の大人気と、非常の死への同情が相まって、ひとしお愛惜の情をかきたてていることがあろう。愛情と崇敬の情、いってみれば「友の会」的心情であるが、今回初めて参加してみて、これが色濃く感じられた。死後20年とはいえ、正式葬儀からまだ7年半、死から近すぎるのである。その一方で、「研究と評価を混同してはならない」「老舎の失敗作の分析と総括が必要である」「賞讃のあまり老舎像を歪めてはならない」といった意見も、とくに若い世代から出ており、研究組織としては、年とともに研究の視点を強めてゆくのであろう。

（86.5.1）

第三次老舎学術討論会
参　加　日　誌

小林康則

今回の参加者五名は、中国北京の友好賓館で集合・解散というかたちでした。平松先生が3月12日、柴垣先生と小林が14日午後、杉本先生は15日の夜、中山先生は15日といった具合でし

た。又、帰国はそれぞればらばらでした。この日誌は、柴垣先生と小林を中心に記してみました。

3月14日　　大阪より北京へ
　2：30 PM　　友好賓館着
　4：30　　舒乙さん来る。
　5～6時すぎ　　幽州書屋訪問

3月15日　第三次老舎学術討論会
（15日～19日）
（北京語言学院主楼南側一階の電影庁にて）
9：00　開幕式
あいさつを述べた人は14名
呉祖光、王松声、孟広来、駱賓基、呉組緗、呂必松、劉再復、陳昊蘇、馮牧、欧陽山尊、盛成、温建平、胡絜青、柴垣芳太郎　以上の方々でした。
10：30　記念撮影
11：00　討論報告
①韓経太（北京語言学院語言文学系）
「論中国新文学発展歴程中的老舎」
午後
②魏韶華（蘭州大学）
「現代性与伝統性的交戦」
③范亦臺　（青海師範大学）
「民性美 ― 老舎的美学追求」
④アンキポフスキー（舒乙氏が通訳）
「蘇联対早期老舎創作和《猫城記》的評価」
⑤杉本達夫（早稲田大学）
「関於文協的財政与老舎」
6：30～8：30　PM
対外友好協会の招待宴（王府井・全聚徳にて）
友協側からは、林林さん、洪道源さんともう一人。呉祖光さん、胡絜青さん、舒乙さん。日本側は私たち五名。

3月16日
午前
①樊駿（中国科学院文学研究所）
「老舎二十年祭」
②宋永毅（上海芦湾区職工業余大学）
「時代的潜勢力与心理遐想」
③李潁（天津市芸術研究所）
「作品是評価作家的唯一尺度」
④張静河（江蘇・揚洲師範学院）
「従老舎的芸術風格看他対新文学的貢献」
午後
⑤孫玉石（北京大学中文系）
「老舎的芸術地位和現代文学史観念的更新」
⑥平松圭子（放送大学）
「試論《茶館》結構和形式上的一些問題」
⑦趙園（社会科学院文学研究所）
「《1985年現代文学研究述評》中与老舎研究有関的几個問題」
⑧魏建（山東師範大学研究生）
「無題」
⑨張緒強（南開大学中文系学生）
「無題」
⑩蘇叔陽（劇作家）
「無題」
⑪郝長海（吉林大学）
「無題」

3月17日
午前
①孟琭（中国社会科学院語言研究所）
「北京人・北京事・北京話」
②ボロージナ（ソ連・遠東大学東方系）
「談老舎抗戦期的創作」
③スゴーソン（北京大学中文系）
「無題」
④王棟（南京師範大学中文系）
「無題」
⑤曽広燎（南開大学中文系）
「関於老舎研究的方法」
⑥　洪忠煌（天津市芸術研究所）
「談談研究方法問題」
⑦黄会林（北京師範大学中文系）
「対《四世同堂》的評価」

午後

午後の分は題なしで自由に話していました。

⑧朝戈金（内蒙古大学漢語言文学系）
⑨周東光（上海徐匯機関）
⑩趙大年（中国作家協会北京分会・満人作家）
⑪蘇叔陽（劇作家）
⑫孟憲仁（遼寧大学）
⑬冉憶橋（上海師範大学中文系）
⑭孫蔵（中国人民解放軍芸術学院）
⑮史若平（済南・山東大学出版社）

夜・ビデオ観賞

「老舎在山東」約30分
「月牙児」　約2時間

3月18日

午前

8：30　老舎足跡参観　　18ケ所
12：00　舒済さん宅で打鹵面をごちそうになる。

午後

2：30　茅盾故居見学（友好賓館の近く）
4：40　再度老舎故居訪問、あと晋陽飯荘で　山西料理をごちそうになる。
（8：30ごろ帰館）

3月19日

午前　　意見の発表

①李輝（北京語言学院）
②万平近（福建省社会科学院文学研究所所長）
③史承鈞（上海師範大学中文系）
④馬小弥（中国人民大学）
⑤孟広来（山東大学中文系）
⑥関経新（社会科学院少数民族文学研究所）
⑦張静河（江蘇・揚州師範学院）
⑧李　荔（中学語文教師）
⑨呉小美（蘭州大学）
⑩范亦鼕（青海師範大学）

以上で日程はおわり。

閉幕のことば

王行之

午後

联歓会

出演　方家胡同小学の子供たち
北京人民芸術劇院の人たち
青年芸術劇院の人たち

3月20日

天津にて大鼓詞等を聞く。

天津賓館で、小彩舞さんに会い、一曲きかせていただく。

3月21日

南開大学・南開中学を訪問

3月22日

午前

中山公園散策のあと、菜市口胡同に魯迅の足跡をたずねる。

夜

烤肉苑にて食事

3月23日

午前

再度・老舎足跡をまわる。

3月24日

午前

中国現代文学館を訪問

夜

呉祖光さん宅へ招かれる。王行之さんも同席。

3月25日

午前

盲人の剛振華さんを訪問。剛さんは老舎が仲人した人。

帰路、臥仏寺・碧雲寺・八大処などの所を通り、途中、春宴楼に寄って餃子を食す。

夜

老舎故居へ、胡絜青さんや舒乙さんにおわかれのあいさつに行く。

3月26日

午後3時　帰国。（大阪へは7時すぎ到着）

香港「老舎専題討論会」に参加して

藤井栄三郎

香港中華文化促進中心主催の「老舎専題討論会」が四月二十四・五・六の三日間、香港中環の同中心講演会場で開かれた。発表者は中国六名、日本二名、香港・マカオ各一名で、日本勢は伊藤敬一氏と私である。連日午前午後とも二名ずつ各自一時間発表を行い、そのあと、その二人に対して公開の質問と討論が一時間行われる、という形式であった。まず三日間の講師と演題を掲げ、発表の要旨を御紹介する。

四月廿四日（木）　午前

胡絜青女士致開幕詞

王行之（中国社会科学院）：「創造者老舎」

趙　園（中国社会科学院）：「老舎与中国現代〈城市文学〉」

公開討論　　午後

呉小美（蘭州大学）：「論老舎現代性与伝統性」

李　輝（北京語言学院）：「老舎創作個性新探」

公開討論

四月廿五日（金）　午前

范亦豪（青海師範大学）：「談老舎的美学追求」

藤井栄三郎（京都産業大学）：「縦観老舎小説」

公開討論　　午後

伊藤敬一（東京大学）：「微神小論」

楊　昆崗（香港浸会学院）：「〈茶館〉在現実主義戯劇中的位置」

公開討論

四月廿六日（土）　午前

程祥徽：「老舎作品的語言風格」

舒　乙：「老舎評価二十年的変遷」

総結討論

【発表概要】

王行之：王行之氏の講演はいわば此の討論会の基調講演とも言うべきもので、まず此の十年間の老舎研究の展開と主要論文、中国に於ける老舎学術研討会の現況を紹介した後、老舎は単に民衆の生活を熟知していたがゆえに名作が生めたのではない。彼が社会、歴史、人生について独特な思索を深め、芸術性を追求したがゆえに、また生涯不断に前人と自己を乗り越えようと追求を続けたがゆえに、独特な文学世界を創造し得たのである、と老舎の創造者たる所以を明かにした。

趙園；老舎の北京はその基本的文化形態から言えば「郷土中国」に属するものである。老舎はそうした理解により、その特徴を把握したのである。欧米的な都市モデルに依るならば中国には現在までまだ「現代都市文化」はない。然し、中国近現代の都市発展の独特の道程を考えれば、老舎の創造したものも一種の「現代都市小説」であって独特の価値を創造したものであり、この種の「都市小説」の範型を提供している。として、此の面からの老舎の小説の評価の必要を指摘した。

呉小美：中国の現代化の過程に於ける重要な問題の一つは、現代性と伝統性の関係、であるが、老舎は広く深く此の問題にとりくんだのであり、彼の作品は此の角度から時代と民族について考察している。老舎の現代文化の見方は両面的で、現代意識の次元から伝統に対し、伝統文明から現代文明に対して批判した、それゆえ彼は常に醒めた頭脳を以って「老国民」に対する批判を行い、芸術的才華をその中に発揮したのである、と論じた。

李輝：真に偉大な作家の芸術精神は、民族意識と時代意識の綜合であるべきで、従って真に

偉大な作品は深厚な民族的歴史的内容と強烈な社会的時代的統一である。中国現代文学の研究も第一に広汎な背景に向かい、ついでミクロな分析とマクロな概括の高度な統一に進まねばならない。総体的な研究の空虚と具体的な研究の瑣末主義から免れることが出来る。として、此の観点から中国現代文学を見るとき、老舎は真先に注目を惹く作家であって、その作品の魅力は、時代的色彩を透して示される沈静な歴史的反省、一種強烈な生活感に基く歴史的深度と理性的遠望である、と指摘。

范亦豪：老舎の作品が読者の美感と愉悦を惹き起すのは、其処に中国の「民性美」を見出すからである。老舎のこの美学的追求は、喜劇、悲劇、及び正劇の三段階に分けられる。抗戦の最後の段階に至って、彼の作品は「民性美」が時代の闘争と結合してこそ滅びず、民族精神の偉大な力を発揮することを具体的に表現したのだと指摘し、中国の現代文学はその始めから民族文化伝統の批判と開発の二つの任務に直面したが、老舎はこのために他人の及ばぬ努力をしたのだ、と結んだ。

藤井栄三郎：作家の作品は、彼の才能と、幼小時の家庭、社会、経歴、文学修業等の種々の因素が作家の内部で相互に関連し交渉し合った所産である。老舎がクリスチャンであったこともその因素の一つであるが、この点についてはまだ積極的な評価がなされていない。しかし少くとも、キリスト教の倫理と思考法は、彼の小説のリアリズムを成立させる一つの因素となっているのではないかと提起、まず彼の作品中に散見するキリスト教への関心に触れ、「駱駝祥子」の中でマタイ伝の一節を逆用していることを例証として挙げ、短篇「大悲寺外」「歪毛兒」について簡単な分析を行い、後者の下敷となったD．J．Beresfordの短篇に言及し、また他の二、三の作品の人物に対する作者の扱い方にも触れた。

伊藤敬一：老舎の短篇「微神」は象徴的手法と色彩に富み、現実と幻想の交錯し合った、「駱駝祥子」を代表とする彼のリアリズム諸作品とは表裏の関係にある謎に満ちた作品である、と前置きして、此の短篇の構成を五段に分け。各段に現れる種々の事物、イメージの持つ象徴性について細緻な分析を進め、作家の伝記的事実との比較、他の諸作品中に見られる人物、事件との関連を綿密に考察し、此の作品のヒロインが他の多くの作品に見られる女性の形象の原型であると指摘した。「微神」の象徴性が実は老舎のリアリズムとつながり表裏の関係にあるものであることを明らかにし、初恋の傷手をのり越えて、広く社会の下層に沈む女性の運命に考察を進めて行った老舎の作家精神と力量を明らかにし、従来精緻な分析の見られなかった此の作品の意味を解明して、ミクロ的な分析とマクロ的な把握の結合を感じさせた。

楊昆崗：まずイプセン、チェホフ、ショウ、ブレヒト、アーサァ・ミラーと近代劇の伝統に触れ、五四から二十年代初期にかけて、中国ではすでにイプセンやショウの作品の紹介が始ってはいたが、系統的に西方の戯劇を紹介してその長処を吸収することも、中国の伝統戯曲に冷静に対することも出来なかった、と述べ、洪深の《趙閻王》の失敗と曹禺の《雷雨》の成功に触れた。そして、老舎の《茶館》を《趙閻王》《日出》《上海屋簷下》等と比較し、《茶館》の人物の迫真性と言語の生動精錬、劇的効果のすぐれている点は、中国近代劇の他の諸作品の及ぶところではない、と指摘。ついで、イプセン、チェホフ、ブレヒト、ミラーなどと比較しても、社会を反映することの深さは劣るものではない、と《茶館》の位置を論じ、叙事の方法では《茶館》は中国の伝統劇に近く、プロットの設定では、西方の名作劇と同様に「発見」の因素を具え、また老舎が「茶館」を中国の縮図としたのは、丁度チェホフが「桜の園」をロシア社会の縮図としたのと同じだと述べて、如何にも比較文学の盛んな香港らしい観点から、世界文学の中に「茶館」を位置づけて見せた。

程祥緩：老舎の「語言風格」を専ら言語学的な角度から考察して、彼の筆になる人物の対話や叙事の言語が日常交際語体の典範たり得るものだと説き起し、老舎の「語言風格」は「帰納」

と「比較」の方法によって研究し得るとし、帰納法からは、①地方性の言葉の使用、②風格ある虚詞の使用、③センテンスの最短までの縮小、④語音の感情表白機能の存分な発揮、⑤センテンスがよく変式（省略、倒装、挿入等）を取ること、などの特色を挙げた。また比較の方法としては、他の作家との比較によって「彼自身のもの」をとり出すことは出来ようが、比較すべき作家作品は大量を要する。最もよい比較方法は、同一作品の異った言語による表白である、として《鼓書芸人》と《四世同堂》第三部《飢荒》第八十八段から百段までの「複訳」を例証に挙げ、複訳の言語が訳者のものであって、原作者のではない風格成分も沢山含んでいることを指摘した。

討論会の最後は舒乙氏が老舎の評価の変遷と作品、翻訳の出版状況、記念行事と学術討論会、研究団体等について報告し、午後はかなり長い討論が行われて、三日間の会期を終えた。

三月下旬にやっと学年末の繁忙も終わり、一息つく間もないうちに会議のため四月初旬に大学に出ると、中華文化促進中心THE HONG KONG INSTITUTE FOR PROMOTION OF CHINESE CULTUREと印刷した綺麗な封筒がメール・ボックスに入っていた。授業も始まり、原稿作製の時間もなく、旅券の申請もせねばならぬので、どうしようかと迷ったが、舒乙氏からの手紙もあり、外務省からも招請状が転送されて来たので、出席を決意したものの、結局香港のホテルでも原稿を書きつづける始末であった。伊藤氏も同様な事情であったらしく、とにかく二人とも責任を果してホッとしたものである。

「香港中華文化促進中心」は可成り多面的な文化活動を主催している機関のようである。二十四日朝討論会場に入ると、美麗なプログラムと、前日到着後各報告者に求められて提出した講演のレジュメが用意され、立派な録音装置もセットされていて、報道関係者も多数詰めかけて来た。この討論会の記事は大公報、華僑時報、新晩報、快報、文滙報など、要するに競馬新聞を除く当地のほとんどすべての新聞に連日掲載されたのである。近い将来の香港返還を視野に入れた、香港人士の中国現代文学への高まりを示すものであろうが、此の討論会と組合せて、北京人民芸術院の《茶館》香港上演を主催して、満員の大成功を見た「香港中華文化促進中心」の努力はなみなみならぬものであったであろう。

討論会も参加者は中国内地でのように多くはなかったが、発表者との公開討論はなかなか白熱し、時には時間不足の観さえあった。従来香港の現代文学愛好者の関心は一部を除いて、一般にはやはりより多く西方に向けられて来た、と聞いたが、今回のような催しが契機となって、現代中国とその文学への関心と認識も深まって来るかも知れない。二十五日夜招待されて観た《茶館》の上演でも、日本で観た時とは違う観衆の熱気があった。上演場所は昨秋新築という香港芸術中心で、壮麗な吹抜けホールを持つ、モダンな大劇場である。一階から三階までを埋めつくした大観衆の中には、欧米人の顔もかなり見受けられ、舞台の両袖に中文と英文の大字幕が映し出され、やはり中華文化促進中心が編集した《茶館》の中文英文両記の豪華なパンフレットが飛ぶように売れていた。

胡絜青女士は討論会開幕の挨拶で老舎と香港の浅からぬ縁りを語って、香港で老舎関係の催しが行われることの意義を強調し、次の詩で話を結んだ。

一束鮮花熱涙新、悲歌長憶寫書人。
筆不放鬆天難奪、千古潮聲南海濱。

老舎と盲芸人

剛　振　華

〔事務局〕本稿は最近、剛氏より柴垣芳太郎氏に寄せられた私信ですが、老舎に関する貴重な内容を含んでおり、また剛氏自身も公開することを諒承しておられますので、ここに掲載いたします。

尊敬的柴垣芳太郎先生：您好!!

您同您的代表团来我国参加老舍文学学术研究，我作为一名中国公民，老舍先生的挚友，向您们表示欢迎和感谢。

８６年3月２５日，您和您的同事小林先生，在中国老舍研究会副会长王松声等人的陪同下，来我家作客，我全家非常高兴。我们虽然经过简短的交谈，都愿意作为老友相互了解，互相学习，并通过我们的努力增进两国友谊。

您来信寄的照片收到了，很高兴。您在信中说，要我把我和老舍先生的关系写成文章寄给您，以便发表。您如此重视，我表示感谢。只是我水平有限，写不成文章，只能把我对老舍先生的一点感触写给您，以供参考。

我先谈谈老舍先生的为人。老舍先生为人正直，对任何人都是以诚相待，平易近人，从不摆名作家的架子。他的朋友很多，不仅有文艺专家、知名学者，而且有厨师、理发师、花匠以及象骆驼祥子那样的洋车夫。这些人老舍先生都愿意接近，和他们拉家长，了解他们内心深处的感受，同情他们的疾苦，关心他们的衣食起居。这些在他的作品里也看的出来。

下面我就着重讲一讲老舍先生是怎么关心盲艺人的。

（剛氏夫妻。後ろは胡絜青女士の国画.）

盲艺人在旧社会是没有社会地位的，没有演出場所，只靠走街串巷，卖艺为生。在街头巷尾弹起三弦或拉起胡琴唱几段曲艺。靠围观的人出自于怜悯之心，给几个赏钱勉强维持生活。

新中国成立后，各项工作百废待举，可是盲艺人的工作很快就得到了政府的重视，这不能不说有老舍先生一份不可抹灭的功劳。老舍先生是一位进步作家，他热爱新中国，更热爱我们的人民。他认为应当把盲艺人组织起来学习，帮助他们提高技艺，提高思想觉悟，使他们能够发挥自己的特长为新中国服务，同时也使他们得到适当的安置，由此摆脱旧社会遗留给他们的流浪生活。作为北京市人民政府的委员老舍先生，向彭真市长提出把盲艺人组织起来的倡议。彭真市长接纳了这一倡议，亲自批了专款，并委托吴含副市长抓起这件事。 这样于１９５０年１２月，北京市盲艺人讲习班，在北京市东单三条２１号院正式开学了。“盲讲班”一成立就受到市委，市政府的重视，也得到了文艺界有关人士的大力支持。老舍先生亲自担任顾问，他还聘请了李博朝，赵树里，罗常培等人。他们是政府领导，作家，学者。都曾给盲讲班学员讲过课，作过指示，老舍先生更是无微不至的关怀我们。他虽然工作繁忙，仍是经常亲临指导给我们出主意想办法。那时我们隔几个星期，就在北京市文联小礼堂，搞一次盲艺人的曲艺音乐专场演出，聘请有关部门的领导以及电台、报社等新闻界的同志来参观演出。这样做的目的是为盲艺人扩大影响增进社会对我们的了解，推荐人才寻找出路。经过努力确实很有成效，象歌舞剧院，部队文工团以及上海音乐学院等处，都从这里选拔过人才去担任教员或演员。当然被选走的，都是些水平较高的演员，是少数人。要想给二百多名学员都安置了工作，当时确实有困难。于是老舍先生就动员我们到农村去开展工作，也给我们讲话说：“农民那里最喜欢曲艺，你们到农民中间去吸收营养，选择题材，然后再编成曲艺唱给他们听，农民一定会非常欢迎你们”。他鼓励我们说：”你们眼睛虽然看不見了，也要用你們的马杆儿去戳戳广大农村的土地”。老舍先生的话我们照办了，确实得到了很大的收获。１９５１年９月成立了首都盲艺人曲艺实验工作队，队员是从“盲讲班”学员中经过考试选

拔出３６名人员组成。剩下的人员继续学习，边学习边演出。

曲艺工作队一成立就非常活跃，当时中央人民广播电台、北京电台一、二、三、四台都有我们演出的节目。还深入剧场、庙会、街头巷尾、工厂、农村、机关学校，到处都有我们的足迹。到处都能听到盲艺人那发自肺腑之声，歌唱我们的新中国、歌颂中国共产党、歌颂我们的人民、歌唱人民中间的英雄事迹和模范人物。当时我们在群众中影响很大，无论是深度还是广度，都是其他人所不能比的，当然也有她的历史原因。我们主要配合中心任务宣传如：抗美援朝，婚姻法，三反五反以及爱国卫生运动等等。任务来的急，别的剧种不如曲艺来的快，因此就更显示了我们曲艺工作的重要性。总之，在那伟大的历史变革时期，盲艺人也和健全人一样，为国家，为人民做出了重大的贡献，而这项工作的开创者、引路人正是老舍先生。

我和老舍先生的关系

我和老舍先生是有深厚的感情的，他是我最崇敬的长者，我们的关系是从工作上建立起来的。我当时担任“盲讲班”的班长，工作队队长。因此在工作上和老舍先生接触较多，并且有些事情要由我去贯彻执行。老舍先生很重视我，他认为我思想进步，工作积极，有魄力，有闯劲，有事业心。当时我在工作中也确实是有那么一股使不完的劲，而这种力量的源泉正是来自老舍先生那里。老舍先生曾多次鼓励我说：“你虽是盲人也要干出一番事业来，要做到身残志不残，把工作做好了，就能够影响别人。让别人看看一个盲人都能做到的事，我们为什么做不到呢”。老舍先生这些谆谆教导作为我前进的动力，使我在工作中永往直前，从不后退。我的工作有了一点成绩，党和政府都给了我极大的荣誉和待遇。我曾先后担任过北京市盲艺人讲习班班长、首都盲艺人曲艺实验工作队队长、曲剧团团长、剧场经理、工厂的厂长以及市盲协委员等社会职务。我还参加并当选过两届北京市青年代表，并还被选过“北京市模范文艺工作者”受到政府的物质奖励。这一切从前我想也不敢想，可是在党和政府的领导下，在老舍先生的直接帮助下，却成了活生々的事实。我真是从内心里感激共产党，更感激那令人敬佩的老舍先生。

下面我再谈々老舍先生是怎么样关心我的婚事的。我原来的爱人叫李玉玲，她的外祖父也是盲艺人，而且当时在社会上还是有一点名气的盲艺人叫瞿少庭。李玉玲从小就陪着她外祖父外出卖唱。解放后，她参加了盲艺人工作队，负责给大家读々唱詞，读々报纸，照顾盲人演出。因她从小和盲人在一起，所以盲人的生活习惯她都很了解，工作做的很出色，对我的帮助就更大了，成了我工作中一名得力的助手，时间长了两个人都有了爱慕之心，产生了纯真的爱情。５２年初我们就要结婚了。老舍先生得知了这个消息非常高兴，他认为一个年青美貌的姑娘热心的辅助一个盲艺人，无私的把自己最宝贵的爱情奉献她所爱的人，这是多么純真，多么高尚的道德情操啊!!这件婚事本身就说明新旧社会的不同，旧社会盲艺人受欺辱，新社会盲艺人才能得到做人的尊严。人生的幸福，家庭的欢乐，只有在新社会盲艺人才能得到。

这件事非同一般，一定要热々闹々的把它办好。老舍先生在百忙之中，亲自为我们筹办婚事。在老舍先生的倡议下，市文联在艺校礼堂为我们举办了盛大而隆重的结婚仪式，老舍先生亲自到场祝贺并赠送礼物。工作队全体队员，盲讲班学员以及北京市戏曲界知名人士，剧团代表等都前来道喜、祝贺，真是盛况空前!!市文联负责人王松声先生做我们的主婚人，老舍先生做我们的証婚人，并给我们讲了话。他说：“祝贺这一对革命伴侣。这件婚事足以说明新旧社会的不同。旧社会盲艺人生活艰难，倍受歧视，新社会盲艺人受到政府的关怀和重视，工作有了成绩，也有姑娘爱他了。”他说旧社会姑娘找对象要看男人长相如何，家里有多少钱，有多少土地，新社会不看这些。他风趣的说，土地多了那是地主，如今姑娘找对象爱的是思想进步，工作积极。他祝愿我们永远成为一对幸福夫妻，老舍先生对我们的祝愿，我牢记在心。不幸的是这一切在十年动乱里卻成了批判的材料…… 致使我的爱人李玉玲中年丧生，終年仅々４５岁。

我现在的爱人叫郑俊英，也是健全人。她同情我，关心我，关心我的工作，又是一位我得力

的助手。在这幸福之際，我怎么能不想念那教我、帮我的老舍先生呢。可惜的是早在那十年动乱的年代里，他老人家就和我们永别了。

老舍的夫人还在，身体很健康，当初我和李玉玲结婚时是老舍先生的証婚人。所以我这次再婚也一定要把这个消息告诉老舍的夫人胡絜青女士。当我把这个消息告訴她老人家时，她非常高兴。这是在８５年的五一。这天一早，由我的老领导，老朋友王松声先生同我俩一起到老舍家去看望老舍夫人，送上一盆喜糖。老舍夫人非常高兴，当场泼墨作画，并为我们题词，祝贺我们新婚之喜。您们来我家作客时，曾在这幅画前照下了宝贵的镜头，我再次向您们表示感谢。照片我要永远保存。

以上是我对老舍先生的一点回忆！不成题材，因我才疏学浅，不能很好的描述给您我对老舍先生的感激之情。所以望您在此基础上发挥您的才能，使这一位中国的艺术家、作家老舍先生在中日两国人民中间生根开花。我们要永远纪念他。

最后请允许我再一次向您并通过您向您的同行表示感谢！祝您生活愉快，身体健康。

您的中国朋友　剛振华

（刚军代笔）１９８６

老舍幽黙詩文集

―「不遠千里而来」と二、三の作品

金森由美子

「老舍幽黙詩文集」は雑誌「論語」を中心に林語堂系の出版物に発表されたものを集めて１９３４年に出版された、老舍32才から34才の作品集である。10篇の「詩」と25篇の「文」から成る。「幽黙詩文集」ではあるが、内容は決してユーモアではない。（中国語の“幽黙”自身がもつ問題もあるが）「詩」は時局や人物に材をとった風刺詩であり、「文」は題材も形式もさまざまであるが、やはり風刺の傾向を強くもった戯文である。老舍の真のユーモアはこういう短い形式のものでは発揮されにくく、他の作品を待たなくてはならない。

なかで、時局―いわゆる「国難」に材をとって風刺をやる、というのは詩文集のひとつのめだつパターンである。ごく大雑把に考えれば、詩文集は上記のような「国難に関するもの」と「その他」という分け方もできる。「国難」はこの詩文集の中で老舍の主要なテーマである。だがこの詩文集で「国難もの」の題材を扱う老舍の筆は、一面「俏皮」という批評がまちがいではないと思える。例えば、「詩」の「長期抵抗」で彼は軍閥の日本への「長期抵抗」を次のように戯画化する。

チンピラめ　おまえ　やるってのか
それならおれはすぐに電報を打って
おまえの祖先をコケにしてやるぞ！
それから長期抵抗！　と大声で叫んでやる
やるとも　おまえの耳はつんぼじゃあるまい？
おまえはこっちでやるってのか？　やれよ
おれはあっちへいってションベンしてくる
これるか　チンピラめ
くる？　ようしチンピラめ　気でも狂ったか
おまえ　ほんとうにくるのか
じゃ　おれたちは明日また会おう
狂犬とケンカするのは英雄じゃない
おれは今日のところはおまえをやらない
明日もやらない　あさってだ
お、あさっては正月で　おれは休みだった

老舍の筆は新聞の風刺漫画のあり方に近い。風刺の対象からは完全に離れた位置にいる。

「文」の中の「不遠千里而来」（千里の道を遠しともせず）はしかし、日本の侵略という「困難」に際して、わが身の安全のみを求めてひたすら逃げにかかる「逃跑主義者」（脱走者）を主人公にして、一読奇妙な印象を残す。この短篇の笑いは、他の「国難もの」のように風刺ではなく滑稽を基調としている。主人公の「王先生」は滑稽劇（ファース）の主人公の特徴を備えて登場する。即ち読者に見抜けるような小人物である。ふつうファースでは読者或は観客

は安心してこの小人物の行動を笑うのであるが、その笑いには共感もしくは許容がある。では老舎はこの時期脱走者に対して何らかの共感もしくは許容があるのか？

次に、もし許容できる小人物を主人公に設定したとしたら、「国難」をバックの深刻な情景との組合わせの場合、老舎では悲劇になるのではないか？　しかし主人公は脱走に成功する。なぜそうしたのか？

しかも途中からこのファースは笑えなくなる。これも老舎の意図したところであるのかどうか、或は失敗作なのか？　これらをひっくるめて、この短篇で老舎はいったい何が書きたかったのか？　「不遠千里而来」はこれらの疑問と、重い読後感を残す。

主人公の王さんは、檮関が陥落したというニュースをきいて北平も危うくなったと考え逃出すことにする。この短篇は、北平の駅に行列をつくるところから、無事済南に到着するまでの道中記である。物語は次のように始まる。

> 檮関が陥落したときいたとたん、王さんは結婚を思いたった。さて、どこで華燭の典をあげようか？　天津と北平はもとより縁起のいい所じゃないし、香港では遠すぎる。
>
> それに第一まだ恋人をみつけていない、まず一番に恋人をさがすのがいいだろう。しかしここでも又、土地の問題がからんでくる、どこでさがすべきか、というのだ。戦闘があっていて騒然としている所は女をさがしやすいが、結婚というのは、ポンポンと頭数だけそろえて「一丁あがりっ！」っていうもんじゃない。やはりそこは　めでたい太平の地へ行くべきだ。そこで王さんは北平を離れるのだ。決して日本兵がこわいというわけじゃない。

老舎は、市井の小人物の王さんについて冗舌を楽しんでいる。ともあれここから王さんのドタバタ喜劇調の脱出行が始まる。王さんは駅に行くが切符が買えない。するとこういう時にはとっさにいいチエが浮かぶもので、王さんは自分を小荷物にして発送しようとする。しかし取扱い所はあいにく足のある荷物は受付けない。右往左往したあげく果物や酒を買いこんで長期戦で汽車を待つことにする。覚悟を決めると頭はスッキリ冴えてくる。

> もしひとたび銃がうなれば運転手はすぐに発車させるんじゃなかろうか？　そうなればこの王さんだって飛び乗っていっしょに逃げる。切符を買う必要だってないわけだ。まず天津までひとっぱしり、運転手は汽車をまっすぐ英国租界の大ホテルの前につける、飛び降りる、バタン！　ホテルにはいる、コーヒーを飲んで顔をひとふき、汽車はまた出発する。今度はいっきに南京まで、それとも上海だ。こよいのロビーは、シャンデリアがあかあかと――王さんは二黄を歌い出した。

王さんはまるで相声でもやっているようである。脱出のいいわけをあれこれしたものの、脱出に疑問など感じていない。彼は市井の人間らしくはあるが、いったいどういう階層の人間か？老舎の小説にはめずらしく、この王さんからは社会的背景がにおわない。例えば、老舎らしく描かれた脱走者というのは、同じ詩文集の中の短篇「討論」の、名前も同じ「王だんな様」だろう。彼は財政局長というお役人である。妻に牛耳られて仏租界から日本租界へと引越してきた。日頃さんざんお役所の甘い汁を吸っているが、命あってのものだねである、今また日本軍がくるというので逃亡の準備をしている。老舎の中の脱走者というのはこういうイメージではないのか。

それに比して、王さんの特徴は、さわめてふへん的中国人であるところにある。老舎は彼を描く。彼は小荷物になるのを断わられるが、「有志者事竟成（精神一到なにごとか成らざらん）王さんは志のない役たたずではない」と思う。駅の在りかをまちがえれば、これでひとつ賢くなったと考える。そして「時局造英雄（時局が英雄をつくる）という言葉に確信を深」めるのである。駅で徹夜して凍え死にそうになっ

ても処世訓をくりひろげる。「しかし身のため国のため、これぐらいの苦労がなんだっていうんだ。勢力のあるやつが先に逃げる、金のあるやつが次に逃げる、金も力もないのは逃げないで死を待つ、王さんは結局死を待つたぐいではない。さすれば足るを知るべき（知足）というものだ」

立派な格言は中国ではこういうふうに使われる。老舎の多用する笑いである。

しかしこういう描写は俗物の王さんのイメージをふくらませはするが、彼の脱走に対して読者の嫌悪や軽蔑を呼び起こすほどではない。ある意味ではたくましい庶民像である。しかし次第に読者は王さんに疑問を感じさせられている。そしてギクリとさせられるのである。

食糧が切れると、王さんはこだわらずに高いマントウを買い、そしてこう考える。

胳臂拧不过大腿（強いやつにはかなわない）…マントウ売りが小金をもうけて、それを日本人に奪われても当然の報いってもんだ。…日本の鬼兵だって悪いやつではない。ここまで追いこまれたら中国人をいじめるしかないじゃないか。日本の女郎だって中国人の客をとる、帝国主義ってわけじゃない、あいつらは国産品より清潔だよ。

ここで、ただ身の安全を考えているだけにみえた無邪気な王さんは、はっきり「国難」に対する立場を表明する。

しかし老舎は、ここから急に王さんをつきはなすわけではない。王さんはこういう言を吐きつつも相変らずのドタバタで有能にこの困難な道中を乗り切っていく。王さんは一晩徹夜しただけで汽車に乗れることになる。そのあと災禍に巻き込まれることなく無事脱出できるか、老舎は王さんの気持ちに沿ってハラハラドキドキをくりひろげる。

しかし、老舎はいったい何が書きたいのかという疑問は更につのる。ここで老舎はこの「不遠千里而来」でどんなものを書くつもりだったのかを他の方面から考えてみたい。

心情的にはやはり風刺だったのではなかろうか、と思える。手掛りは最初に出てくる「榆関失守」（榆関の陥落）である。この詩文集の中には、榆関の陥落が文字として表われるのが他に2篇ある、老舎が如何にこの事件に強い関心をもっていたかがうかがわれる。即ち1932年の山海関の陥落である。

「榆関失守」「日軍已陥榆関」とひとつの文章の中に2度も出てくるのは「為被拒遏入使館区八百余人上外交総長文」（大使館地区にはいるのを拒まれた八百余人のために外務大臣に上奏する文）である。榆関の陥落で、あわてふためいて外国の大使館に保護を求めて押しかけた人々の心理の代弁という形であるが、彼ら八百人への揶揄であることは明白である。

公民らはもとより仇をなしたこともなく、義勇軍に声援を送ったこともありません。敵視にはあたらないのでございます。更に今、日本軍は已に榆関を陥とし、華北に迫ろうとしております。今日の敵は明日の友、今日の大使館の客は将来の天皇の臣民です。

皮肉な文章から伝ってくるのは、彼らに対する老舎の憤りである。

「勉舎弟舎妹」（愚弟愚妹を励ます）では序にこうある。

榆関が陥ち、北平、天津が不穏である。弟の二舎と妹の三舎が相携えて学問を棄てて帰郷した。これは明哲保身（賢者は自分に危険をもたらすことはしない）の謂である。

明哲保身―この言葉も至るところで老舎は皮肉に使っている。「詩」自体も、この情勢にも軽佻浮薄な学生への直接的な風刺である。

このふたつの「詩文」はどちらも「長期抵抗」等に比べて作品としての完成度は高くない。それだけに老舎の「榆関失守」に対する心情の性急さが伝ってくるようである。

この「榆関失守」に対する切実な関心と、「困難」に背を向けて身の安全をはかる者への

軽蔑から考えると、老舎は当然「不遠千里而来」に於ても脱走者を徹底的にからかって笑ってやろうという意図をもっていたにちがいないと考えられる。

ではなぜ、主人公を王さんのようなきわめて一般的な中国庶民にしたか？　彼が形式をファースードタバタ喜劇に定めたからである。彼は脱走者をなぜかドタバタ喜劇で笑ってやろうとしたのである。その結果、ファースでサタイヤ（風刺）的心情を表わす、ということになった。途中から表われる主人公と物語との乖離はここに起因している。

もっとも老舎は、詩文集の序の中で京劇の中のファースの名前（「打沙鍋」「瞎子逛燈」）を出すとともに、「我自己也愛看胖哈台与瘦帯菜」とローレル・ハーディのコンビに対する愛好を述べているし、詩文集と同じ時期に書かれたものの中には「賈波林」（チャップリン）の名も出てくる。彼がドタバタ喜劇を書いてやろうと思ったとしても不思議はない。

しかし、形式をドタバタに定めたとき、当然内容も規定されてくる、アメリカのドタバタ喜劇の道化は、老舎の筆をとおして、中国の民衆の一人一王さんになった。

さて、こういう情況の下で生まれた王さんは、何をしでかすことになるのか？　老舎はローレル・ハーディ調のスラップスティックを中国を舞台に書こうとする。しかしそれは現実そのものを映し出してしまうことになるのである。スラップスティック調の現実ーブラックユーモアである。

どこに行こう？　上海？　飛行機が榴弾を落として稲香村の店員がわんさか死んだときにゃ、人間の腸が腸詰といっしょに空まで舞いあがった。……

済南？　済南虐殺事件はまだやっているのかなあ？

そして王さんもまた、中国式スラップスティックに参加しなければならない。虎口を脱した王さんたちは、徳州駅で食料を買いに走る、トリの丸焼きは徳州名物である。

王さんは人後に落ちるものではなかった。肉弾戦をやり、フットボールの手練をみせ、大洪拳をあやつって、血路を開いてトリの丸焼きに突進した。…怒号が耳をふるわし、気分はいやが上にも盛上った。トリの丸焼きを食らわずんば、いずくんぞ人とならん？王さんは一本もぎとった。…アイヤー、美味なるかな。……

シャオピン売りの子供が群衆に引きちぎられたのだ、シャオピンを買ったら、おまけに子供の手の一本か、耳の片方をもぎとったのだ……おまわりはあせった。十三個の節のある鉄棒を振りまわしてなぐりまくった。なぐられて皆は痛快だった、頭は熱くなり、口には微笑が浮かんだ。おまわりがなぐらなけりゃ　おまわりとしては何をするんだ、群衆になぐられなけりゃ　誰がなぐられるっていうんだ。まさか日本人がなぐられにくるっていうわけじゃあるまい？　なぐれ、なぐれ、どうせこちとらはトリの丸焼きを手に入れなければ絶対に引っ込んだりしないんだ。

そしてトリの丸焼きを手に入れて、意気揚々と汽車に戻ろうとした王さんは、入口の付近は鈴なりの人で乗込めなくなったことを知る。王さんはあせる、「それでもさすが中華の人民、黄帝の子孫たるもの、なんとか方法はあるものだ、ホラ、誰かが声をはりあげている、“窓から乗込むものはおらんかねー、一块銭だよー”王さんが値切ったあげく、それで乗車に成功するのは論を待たない。王さんの処世能力はたいしたものなのである。プラットホームに残された人間をみて、王さんは満足する、ばかなやつらめ！

しかし已に、王さんがどれほどドタバタをくり返そうと、読者はもはや笑えなくなっている。王さんの滑稽な言動と、現実の残酷さとの間に空隙ができているからである。それでも王さんは元気に目的地に着く。最後は、無事に済南に着いた王さんの感想である。

駅を出ると、婚姻の大事を思い出した。しかし家にはもうひとり嬶がいる。まず家に無事を知らせるたよりを出さなければなるまい。…旅館について手紙を書きおえるとタンメン

を食べ、思い出して新聞を開いた。北平はまだ爆撃を受けていなかった。失望は大きかった。ひとねむりしたら恋人をさがしに行くとするか。

ここに至って、読者は、王さんの現実的処世能力の源は酷薄さだったのか、と思いしらされる。王さんはファースの主人公としては、一点の愛すべき所もない酷薄な人物に仕上っているのである。

中国の民衆の酷薄さに対する鋭敏な感覚は、老舎の小説のひとつの特徴であるが、ここでも、老舎が主人公を俗物の中国人らしく描いているうちに、王さんはひとりでに酷薄な人間になってしまった、という印象を与える。そしてこの酷薄さは、形式をファースにとったからこそたくまずして出てきたものである。これに比べると、同じく脱走者をサタイアで描いた「討論」は、その風刺のほこ先が王だんな様にのみ向けられていて、作品としてはまとまっていても印象は軽い。老舎は王だんな様になんの痛痒も感じていない。が「不遠千里而来」からは、老舎の嫌悪が伝わる。文中で老舎は、「国家もいつも平安無事であるべきではない」などと王さんに言わせているが、この言葉とはうらはらにこの短篇からは中国各地の都市に対する老舎の悲痛な思いが感じられるのである。

「不遠千里而来」について結論めいたものを言えば、形式をファースにとって、脱走者をひどい目にあわせて笑ってやるつもりだった老舎であったが、脱走者は一人歩きして、したたかに、なんの犠牲を払うこともなく脱走に成功した。そして作者はその酷薄さに嫌悪の情をもよおしているのである。

一方に国難があり、一方に或はそれを食いものにする人間がおり、或は軽佻浮薄な若者がおり、或は酷薄になってしまった民衆がいる。「老舎幽黙詩文集」はこれらひとりひとりのスケッチである。

老舎資料近刊（3）

新入手資料

1. 老舎「小人物自述」　方舟（唯一新型家庭月刊）３９期、３７.８.１　Ｐ６７～８４
2. 老舎「羅常培『北京俗曲百種摘韻』序一」　来薫閣書店　５０．１１月　Ｐ１～２

１９８４年追加（2）

27. 小沢信男「哄笑が虚空に谺をよぶ――老舎作『茶館』を観る」　社会評論　１月　Ｐ110～115
28. Lao She “THE TWO MAS”（Translated by Kenny K. Huang & David Finkelstein）三联書店香港分店　８４年　Ｐ１～３０６

１９８５年追加（2）

13. 老舎『龙须沟・茶館（文学小丛书）』　人民文学出版社　３月　Ｐ１～１６３
14. 『老舎文集第８巻』人民文学出版社　５月　Ｐ１～４５０
15. 文天行編『国統区抗战文艺运动大事纪』　四川省社会科学院出版社　６月　Ｐ1～３３１
16. 曽广灿「《四世同堂》――北京風俗画巻」天津日报　７月１０日４版
17. 曽广灿・吴怀斌編『老舎研究資料（上）（下）』　北京十月文艺出版社　７月　Ｐ１～１４０８
18. 周瑞祥・任宝贤・王宏韬『难忘的二十五天――茶馆在日本』　北京出版社　７月　Ｐ１～１８９
19. 杨中「“作家必需是全民族的心灵”――老舎的“重轰炸机”说与他创作的发展」　抗战文艺研究　３期　８月１５日　Ｐ４９～57
20. 曽广灿「老舎与冯玉祥」　中国法制报　８月１６日

21. 万平近「老舍与抗日话剧运动」 福建论坛4期 8月20日 P28～32
22. 曽广灿「林语堂向“文协”捐贈房产」 今晚报 8月21日3版
23. 胡絜青・王行之編『老舍剧作全集第4集』 中国戏剧出版社 8月 P1～716
24. 曽广灿「为祖国而战的作家—— 老舍」 中国法制报 9月6日4版
25. 丁浪「电视剧《四世同堂》学术讨论会在京召开」 人民日报 9月9日7版
26. 赵晏彪「“幽州书屋”一瞥」 北京日报 10月9日3版
27. 本社评论员「《四世同堂》的启示」 北京日报 10月13日1版
28. 吕国庆・张虎・姚爱伦「来自幕后的报告——电视剧《四世同堂》诞生记」同上1版 4版
29. 姚爱伦「电视连续剧《四世同堂》获特別奖」 北京日报 10月16日1版
30. 黄威・房冠明「第五届“飞天奖”暨《四世同堂》特別奖 友奖大会在京挙行」 北京日报 10月17日1版

1985年 (3)

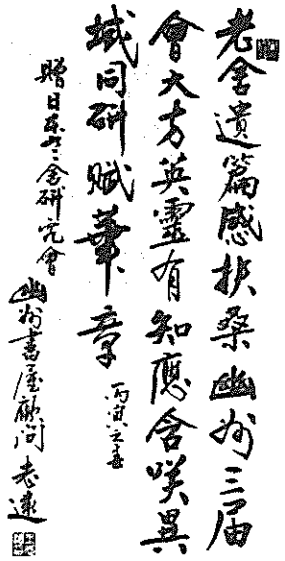
159. 胡絜青・舒済・舒乙・童道明・陈丹晨・蓝翎・鮑昌・夏淳・蔚凤・李文玲「电视剧《四世同堂》談丛」 新华文摘 10月25日 P148～151
160. 赵家璧「《四世同堂》的坎坷命运」 同上 P242～244
161. 侯鸿緒「一把老舍題写抗战詩的纸扇」 同上 P119
162. 王恵云・苏庆昌『老舍评传』 花山文艺出版社 10月 P1～402
163. 胡絜青「赤包儿」 北京晚报 11月1日3版
164. 侯利人「方家胡同小学挙行老舍作品朗诵会」 北京日报 11月2日2版
165. 舒乙「老舍和“青艺”」 文艺报 11月2日
166. 「老舍英文書簡」 人民日報(海) 11月6日8版
167. 李武魁「走訪《龍鬚溝》中的“小妞”」 人民日報(海) 11月8日7版
168. 孫集寛「従“大赤包”到“侯奶奶”——訪北京人藝著名演員李婉芬」 人民日報(海) 11月12日7版
169. 林汝为「改編导演《四世同堂》的体会」 光明日报 11月14日3版
170. 孙允文「《四世同堂》电视剧的主題歌」 同上
171. 蒋力「在老舍家作客」 光明日报 11月16日2版
172. 李家琪「「舍予」歌」 人民日报 11月19日8版
173. 蒋力「在老舍栽種的柿子樹下」 人民日報(海) 11月24日8版
174. 曽广灿「论老舍小说創作的选材特点」 南开学报 6期 11月 P26～35
175. 煥书「老舍小说之谜 —《小人物自述》发現经过」 北京晚报 12月3日3版
176. 樊骏「在遺憾和欣慰之余 —— 重评小说《四世同堂》引起的思索」 文艺报 12月7日3版
177. 李家琪「“舍予”之歌」 人民日報(海) 12月8日2版
178. 刘卫星「老舍和方家胡同小学」 人民日报 12月9日8版
179. 「老舍之子舒乙回憶老舍」 人民日報(海) 12月15日
180. 日下恒夫「老舍のもうひとつの著作 ——『言語声片』の話 —— 、老舍研究会会報第4号 12月15日 P1～4
181. 倉橋幸彦「老舍文学の原点 —「小人物自述」—— 」 同上 P4～7
182. 「老舍資料近刊(2)」 同上 P7～12
183. 倉橋幸彦「「老舍資料近刊」(『老舍研究会会報第3号』所収)補正」 同上 P12～13
184. 杨景辉「话剧新芽在破土 —观方家胡同小学话剧演出有感」 戏剧报 12期
185. 杉本達夫「文協の財政と老舍」 中国文学研究 11期 12月 P79～96

186. 柴垣芳太郎「老舎著作題名索引（初稿）」龍谷紀要　7巻2号　12月　P31～79
187. 胡絜青「老舎的四十二篇文」　北京日報　創刊33周年紀念特刊（非賣品）　85年　P35
188. LAO SHE "CRESCENT MOON AND OTHER STORIES"（PANDA BOOKS）中国文学杂志社　85年　P7～324

1986年

1. 舒乙（柴垣芳太郎訳）「老舎物語（上）」図書（岩波書店）　1月号　1月1日　P13～19
2. 冯至「红樱桃与"红娘子"」北京晚报　1月5日3版
3. 黄裳「新發現的老舎童年自傳小説」　人民日報（海）　1月7日8版
4. 胡絜青「怀念周总理逝世十周年」　北京晚报　1月7日3版
5. 胡絜青「豆汁儿」　北京晚报　1月10日3版
6. 中心「日本的"老舎熱"」華聲報　1月21日
7. 「舒乙談《四世同堂》的版本」　人民日報（海）　1月28日8版
8. 曾广灿『老舎儿童文学作品选』　新蕾出版社　1月　P1～278
9. 老舎「小人物自述」　十月　1月号
10. 陈福康・张伟「谈老舎的《小人物自述》」同上　P255～256，247
11. 舒乙（柴垣芳太郎訳）「老舎物語（中）」図書　2月号　2月1日　P47～53
12. 李犁耘　「老舎在北京的足迹」　燕都　1期　2月2日　P26～29
13. 朱开宪「人民艺术家老舎诞生」　北京日报　2月3日2版
14. 舒乙（林芳訳）「老舎生涯の難関　1. 第1の難関」　華僑新聞　2月6日
15. 同上「2. 刀の下ですやすやと」同上　2月13日
16. 同上「3. 最初の決断」　同上　2月20日
17. 同上「4. 二つ目の決断」　同上　2月27日
18. 黄幸群「老舎名劇《茶館》将在港公演」　人民日報（海）　2月19日5版
19. 张嘉鼎搜集整理「老舎的故事」　民間文学　2期　2月20日　P31～33
20. 舒乙（柴垣芳太郎訳）「老舎物語（下）」　図書　3月号　3月1日　P30～36
21. 伊藤敬一「老舎の「微神」について」季刊中国　№4　3月1日　P3～14
22. 汪文「老舎名作再上荧屏　电视剧《月牙儿》明晚播映」　北京晚报　3月104版
23. 马小弥「历史留下的遺憾——也谈《四世同堂》」　新观察　5期　3月10日　P28
24. 舒乙（林芳訳）「老舎生涯の難関　6. 小説を書く」　華僑新聞　3月13日
25. 同上「7. プロ作家として」　同上　3月20日
26. 同上「8. 家族と別れて」　同上　3月27日
27. 閻素偉「巴黎的老舎専家」　人民日報（海）　3月15日8版
28. 阿甲「阿甲申明」　北京晚报　3月25日4版
29. 宝贤「北京人艺将赴香港演出老舎名剧《茶馆》四月初在首都公演三」北京晚報　3月30日4版
30. 刘增林「老舎作品在苏联」　北京晚报　3月31日6版
31. 『老舎文集　第9巻』　3月　P1～508
32. 賈基业「有价値的探索」　北京晚报　4月1日3版
33. 舒乙（林芳訳）「老舎生涯の難関　9.「文協」の旗を肩に」　華僑新聞　4月3日

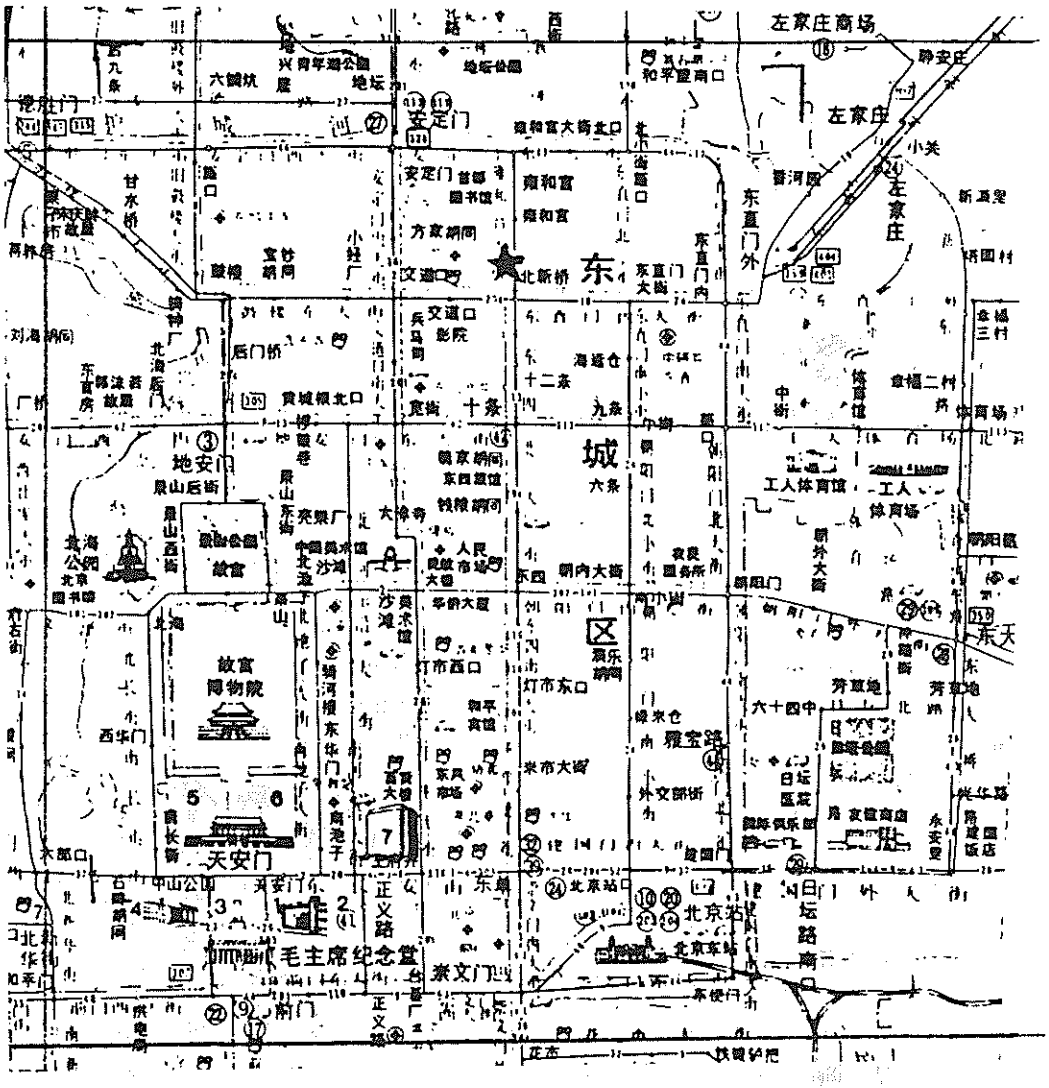
34. 同上「10. 帰国」 同上 4月10日
35. 同上「11. 九つ目の決断」 同上 4月17日
36. 同上「12. 最後の決断、最後の「難関」」 同上 4月24日
37. 「胡絜青話説《四世同堂》 人民日報(海) 4月4日4版
38. 高汾「「京味儿」熱」 人民日報(海) 4月9日8版
39. 王小魯「老舎學術討論會花絮」 人民日報(海) 4月11日7版
40. 舒濟「老舎心愛的月牙兒開起来了(上)(下)」人民日報(海) 4月12日、14日7版
41. 「北京人藝赴港演出《茶館》」 人民日報(海) 4月15日5版
42. 「北京人藝在港演出《茶館》受歓迎」 人民日報(海) 4月21日5版
43. 「老舎專題討論會周四起舉行三天」 大公報 4月22日
44. 「中日港澳学者雲集 老舎專題討論三天」 華僑日報 4月22日
45. 「老舎夫人胡絜青将致詞 老舎討論會今揭幕 内地與日本八專家将發表文章」 大公報 4月24日
46. 「老舎研討會今開幕 中日七學者昨抵步」 文滙報 4月24日
47. 「老舎夫人胡絜青致開幕詞 老舎專題研討今起舉行 内地及日本專家發表有関論文」 新晩報 4月24日
48. 「中日港學者聚首論老舎 週四起進行三天」 快報 4月24日
49. 「老舎對「老国民」批判 呉小美認為最顯個性」 文滙報 4月24日
50. 「在港學行意義特殊 老舎專題討論揭幕 老舎夫人胡絜青致開幕詞」 文滙報 4月25日
51. 「學者討論老舎作品 推崇其獨特創造性 胡絜青説此次討論具特殊意義」 大公報 4月25日
52. 「北京學者王行之表示 内地舉行多次學術研討會 多方面論述老舎文學成就」 新晩報 4月25日
53. 「"老舎與現代文學"討論會在香港開幕」 人民日報(海) 4月26日5版
54. 「范亦豪昨在專題討論會表示 老舎作品有民性美 日本兩位教授也分別發表論文」 大公報 4月26日6版
55. 方雨濤「日本學術界的「老舎研究熱」 訪京都産業大學教授藤井栄三郎」 新晩報 4月28日



事務局だより

◇ 昨年8月、北京の東城擁和宮大街183号、北新橋の北、約50メートル西側に、幽州書屋が開店しました。北京の作家たちの書籍を取り扱っており、特に老舎については専用コーナーが設けられている由です。(柴垣芳太郎氏談)。地図の★が幽州書屋です。また写真は、幽州書屋顧問王志遠氏から本会に寄せられた詩書。

◇　7月19日（土）、名古屋大学文学部にて、
本年度の総会ならびに研究発表会が行なわれます。多数の参会をお待ちいたします。



老舎研究会会報第5号　（1986年6月30日）
〒464　名古屋市千種区不老町　名古屋大学文学部中国文学研究室内　老舎研究会事務局
（TEL　052－781－5111　内線2245）